

内なる学際性を高めて

アエンテ隕石の大量落下、アポロ11号の月探査と南極隕石の発見などがあった1969年を惑星元年とする説によると、第24回月惑星科学会議が開かれる今年、十二支の干支で言えば二周りたったことになる。人間でも24才といえば、大学4年の学部学生も当時のことを知らぬ世代となってしまった。日本でも惑星科学会ができたことを思えば、感慨深いものがある。初期の頃は、既存の分野の色分けの強い中で、隕石学や惑星科学はなかなかまともな学問と認められず、カタコンベに隠れて活動しているような気分になったこともあったように記憶している。

現在の日本の惑星科学会の系譜を私なりにたどれば、揺らん期の幾つかの系列にたどりつく。太陽系形成の理論的モデルを研究していたグループ、南極隕石やアエンテ隕石などの物質科学的研究をしていたグループ、微粒子の形成、隕石の蒸発や衝突実験など実験惑星科学的研究をしていたグループなどなどである。シカゴ大学でボルテージが上がって帰国され、講談社（サイエンスハウス復刊）の「宇宙化学」を著した小沼直樹博士の記憶も鮮明によみがえる。これらの多くのグループの人たちが、シンポジウム、総合研究および重点研究などでより集まったことが、今日の惑星科学の学際性の基礎となっている。ひとたび学会ができると、グループが派閥に転化しないように心しなければならない。

日本の惑星科学の今後を考える時、我々自身の成り立ちを考えることは参考になることが多い。米合衆国の惑星科学は、NASAの惑星探査計画の進展とともに、発展してきた面を考えれば、この方面の立ち後は如何ともしがたかった。しかし、日本でも宇宙研の月探査計画が進行するにつれ、これは徐々に健全な方向に進むものと期待される。問題はその成果をどう理解するかの時、われわれが貯えてきた、太陽系形成論や、南極隕石の物質科学的研究や実験惑星科学などの力が試される時がくる。

惑星科学上の解決されるべき重要な問題を考えるとき、いつも心しておかなければならないのは、何か一つだけの手法で、すべての問題が一度に解決することは、あまり望み得ないことである。一つの仮説は、あらゆる分野の手法と考察によるテストに堪え得るものでなければならない。これまでの学会やシンポジウムなどで、何か一つの重要な問題をうまく説明をするような事実や解釈が得られたかに見えても、別の分野の人々が見れば、まったく荒唐無稽なものに見えることがよくある。学会全体として、惑星科学全体についての一定レベル以上の学際的素養、学力をつけていくことは大切なことと思われる。最初はデュワトリアル・コースのようなものも効果があるかも知れない。

惑星科学を既存の分野の科学の中に位置づけるに大切なことの一つは、学術会議の認知された学会になり、研究連絡委員会の委員を送ることであろう。国外の惑星科学の団体、国際隕石学会や月惑星科学会議関係の機関との対応も、このような機関やわれわれの学会と直接対応していくことも、惑星科学会の国際性を考えれば必要なことであろう。

日本惑星科学会副会長・武田 弘